俳諧句集
後

類類發句集雜部

蝶夢編

戀

忍恋

夏痩とあらへく沢を泪ゝ那　季吟

爭の鵜鶏ゝく伝莢の妙きゝ　芳樹

奚不遇恋

他さゝ〳〵〳〵く〳〵愛ぬ夜ゝれ　発貢

衣〳〵弐覆見ゝて戻りゝ　冬松

契ひあは廓よ蔦色風巾　我黒

早稲田大学文学部図書
雲英末雄
53-7528

不素兎姫すゝ海のうゝ素戸乃　扶桑
庄子の目ゆゝ月枕ゆゝ月ゆゝ　文淵
故郷玉ゝ秦新すゝ乃うゝ新　長虹

逢恨恋

我恋やいに兎吸まぬ素冠軒　嵐雪
哲ふ人よあゝ月峠地の文　碌　、

待恋

まゝ人我姫よまゝ月待ゆゝ　言水

寄梅恋

ゆゝ袖のゝ月ゆゝ月の園の森　飛坡

姫あ衣懐の衣ゝゝゝれてや　太素
ゝ北人袖ゝゝ涙ゝ秋の雲　、
稲つまやこの俤蝶とかり枕　小春
ゝゝれゝ落ゝ明ゆ素戸ゆ
をんゆゝのゝゝゆゝ金を送ゝゝ
ゝゝ名やゝゝ氷ゝ月とゝゝ
金魚にすゝくゝ兎ゝ猫のゝ戸　曲翠
ゝゝゝゝ夜のゝゝけ水ゝれ　その
出ゝ夜やまゝ人よ毛蟲の枝　和及
思ひのて床ゝ蛾ゝて水の月　冰花

冰花　佚中女　我吉

栁立　拙女　花咲

山川

李由

尚白

蚕中妻

舟象

雜二

待恋

荷弓

閑居増忠

、

蟬興

寺平

蟬水

欲言出恋

、

枕候

志ぶかき夜の鐘たそこ迄木ぶかそ
雪くの行方よりこの水鶏かな　子那
　　若糸

別墓

更ら月送るこの方を女あり　旦藁

恐意

さく花やかくる友ちよ志乃迄　〃

起くこの方、孫て五月蚊帳の廣さ　浮橋

送別

乙州の東武に送る

梅ゝ菜はりこの雲の鶴汁　芭蕉

風藻を偲ぶを

高瀬は小夜の中山ふて来め　〃

四人何うぞ立ちのくにやうと馬の餞

ゝ義の市おち義仲寺　〃

曾良は後に病ひ伏して行

きふくらも出ん笠の雪　〃

支考来り伝授
仏ちろ捨もと云り芭蕉一具　芭蕉
麦の種我ちうにつもる乳　〃
孤屋桃ちまき数年ぬりうにつ西川
アラ〳〵天道ありく
雲かたく伝ひまそりも数年　耶坡
月よりも物見つ色を馬茶上　耶水
恨いそたまへ秋の出つ先り　舟象
支考の公案は刺刀ちくそ海ちりうり
新仕ぬ誓ひへ道教能月夜　朱袋

時雨ちまり深田遠ちくく
好色ちまき文芸有へ〳〵大茶盞　自笑
菊の花ひ帰ちる我遠ち
木カラ〳〵秋ひちりすまそ　風雷
桃源書院に伝我遠ち
庵室我引ちくそ先そや風巾　〃
消うもやもかち縄のまれを除　岱水
別備
ちちぬ時茶仏やさそ仏の花　戟人
菊の花きちうつ茶きおうれ　〃

木曽路古へ帰るもかなた　去来
夜をさむみつ中ま旅ら待月　霰艇
立时可忘れやきれ八扇うれ　太子
旅つまの去ん八ぬ子やいゐある

乙州ゟ来りけるに
見さしさへ入るも旅や富士の雪　紹月
なれく枝まする乾秋若蝉　一井
隠ゐる鳥おほろくと何面里　支考
花川くひちも弦ふれ秋の風　、
雲芳ちし胯く次め我まま尺くぬる　嵐雪

太良比の氷踏て能免路ゟれ　杜國
掠吟まゐて时丘まて命我いふゟ
燕を借りて右笠我たてん置　正秀
送りてやひまり餘ほ志て一酒　利合
山川くゐちや家れ忘れ雪　北枝

蓮二法師我送歎
青氣の玉やや解く法く何处へ　乙由

留別

山表や弓張月の白き湖　芭蕉

送る人も送られて行く末の秋　〃

小提灯ふりの尺送りつゝ行く夜道哉　〃

書かるゝに名をとゝめて

扇おくり屏風にさく雪渡る　〃

孤舟尾花に芳那へ棹さゝん

代官の茂る岸よ礼ひふるる那　〃

舎那送り寺ぶり

短夜の名残や新十さう祭　支考

鶴に乗る文衣を軒に文衣　〃

妻笠や田植の笠り侍るまゝ　〃

菊よりの新くさて

しくしくだらの山路も萩の京　嵐良

春ゆくや花てをのゝて大根引　涼菟

東路へ踏へ砂地の名残ぶり　〃

地蔵きりて地獄袈裟とゝり竜　素丸

雑炊の尾花立生ゝ

いやさられ拾ふ尾袈菊の尚　路通

京を出る時人々に日の岡まで送られて

帰るさに別て旅哉恋しさよ　浪化

涼川の庵をおりて

木からしや沖より高き不二の山　許六

立帰る風下も洩り三輪の杉　乙由

宵まで見て泊りし旅寝かな　枳右

雲に寄る翔や出まくれ巾　唐元

手折戸の留守を頼みてゆかしき　諫蛍

羈旅

花の陰謡に似たる旅寝哉　芭蕉

一ッ脱てうしろに負ぬ衣かへ　、

雲雀より上にやすらふ峠哉　、

冬の日や馬上に氷る影法師　、

夜着ひとつ祈出して旅寝かな　、

年暮ぬ笠着て草鞋はきながら　・

悴子にあくてまう川口の出かはり　丈草

おりく泣や出立の橋の下　、

去年

長山寄ょ旅愁のこころ

春の山も今を盛りの桜やと詠の

詠ることも健なるこゝろ雪の旅　亜七

あり紀夜と元氣ひとつ旅路　爲興

元日をきゝ人我乃詠うれ　治徳

まへも新くつゝ立りや旅雲若　耕使

泊りく　鞍もり寄もかゝりの　京女　ちゝ

夜もさそう秋風ちやうゝ九山　芳良

我家遠いとく旅の寄され　治圃

旅人や曙加この蚊屋の出　治荷

時鳥うゝ千ひとゝ家旅きこと　涼菱

鞍壺ょ日色のかゝり我新　、

益雲を尺けく四方異れ　附萬

寄紀夜急裾ょ鞍動く旅ぶり　左次

大名の度乃公もかゝる寄乃郷　許六

らの涼ょ花毛のるれ夜明ぶり　、

涼風や旅ょ昼我姫こかゝる　、

京西の長りあひく

菓の兵我屋ょ汲く山路ぶり　支考

秋風の吹さいとく梅ばかり
初ふりやたをよるつふ枕りの
ゐる士の戸たゝくたこの音乳
旁も風吹く機を用も寒れも
寄たしく梅の実ふる底の元
夜の中に木の葉ぬ我ぬや鶴の音ぬ
舟あそこきやく氷る夏気ゝ那
ちさ陶やぬ姫もちさめ梅の君
夕ちよとの大気ゝ一ちゝ
風の吹のそゝきち蒲盛ちち

支考
丶
玄梅
越人
一有
荊口
放風
冨東
傘下
仙杖

梅ゝ鳥や夜明の馬のいさゝ如
夏ゝゝ夏ゝ食ゝ君ゝ
山中に入ゝ
寒ゝゝ

孤屋
冬松

南部より
青柴のゝ色所ゝ花ゝ
木ゝ月ゝ君ゝ色空の聲ゝ
大気ゝ通ゝ通ゝ秋の

伏見の夜ゝ
ぼのゝゝに

特岳
丶
和及

路通

あて名なく侍もこうらや秋の雲　陳風
蜻蛉やまさく此事爲も不あらじ　万子
旅人や絹うち合もさく不破の月　木因
夕を伸さく長金子養ら馬ぞ上　子那
今宵の月風ふきしぶく衣うへ　乙由

鶉子の宿りて

夕部の蛇新つふうしたろ汁　蕉遊
皮付茶枕あらくふ夜急庵　千橋
かうまや寒蛇新さへ枕さへ　朔雨

名所

元朝の月ろ抱すも見不二ぞ山　宗瀘
花色々ときから花のよ見山　貞室
地ちこう八木のろ氏ふ茶坊ぶ　季吟
富士の山沙弥ふ乳ま姿ふ乳　湖春
三笠殿色ふ紙つ枕て山もか　友静
富士まさふく三月七日八日ろ新　信徳
幸崎の春色花ろう撓まて　芭蕉
象潟の雨や西施ろ新ふの涙

かくつり角ゆりうけて須磨の石　芭蕉
こそ雨ぬれてこやゝ〜ゝ元之川　〃
移り来の古法花堂　〃
四一枚植てちさき新しの乳　〃
青雨に加うれば松や勢多の橋　〃
芳野にてよく
花さくら少も日こゝろの新しき　〃
伊賀の国花垣の法をそのかゝ大事長谷
八幡橋の料は御れうと云伝へ侍りて
一里ゑられ花身を子孫のや　〃

六月や峰の雲おのゝ山　〃
漕ぎ行くに月さゝへる浮御堂　〃
須磨の春月の入る右の方　〃
月よかの東はゝとゝぎす　〃
東の京や奈良ふる古き御達　〃
桟や命ぞ〜ゝ恋の蔦　〃
里遠の国と見るや時ハ十月　〃
見さかゝ名残の田面や雁の面　〃
隅田川みゝ
馬帽子名を紅の紅ゝ　其角

須磨の浦にて伊勢加太に宿る　千角

ゆくすゑの人編を手に敷や大井川　〃

為家卿の歌に春霞たなびくかとよめる　嵐雪

飛び〳〵宮ゐて

嵯峨中の御堂さく敷ゐる　〃

大原や蝶の舞くもふ昼の月　文子

北嵯峨や所々もちまち蒔の蕎　〃

〻の山又ちるうつ花見哉　太素

紀伊のくに伊勢の国へ参詣し道の海路はるく見物に

つゝゝゝゝゝゝ敷の中ふ出つ男佐ら

傳〻ゝゝゝゝゝゝ敷ゐ月ゐ　〃

言伝や迴廊よ夜の明ゆ長よ　涼菟

力ゝゝゝゝ八う敷日や須ゝ敷秋　〃

越後ゝく

人〻〻て新ゝゝ冷しや　〃

河傳ゝゝゝ

ゝゝゝゝ河傳ゝゝゝ　〃

木曽路ゝく

山次ゝゝ見ゝ敷田植ゝ　許六

八橋や　田さらう有て　時雨　許六

宇津の山の山路

十番ゝ　小松ゝ　紅葉の色　〃

西川の紅葉かくいみ〳〵　伊田の大夫〻

裝束つくろひ　きりひ出て

うつの山　我かさに　関のうし　曾良

素堂　節に　身をうし　〃

大ゝ　ひやゝゝの　裏の花　〃

和尚の浦

蛍ゝ　鉄さゝ〳〵　竹男波　孤雲

高人の　ひゝう　孫　高飛山　尺子

麦ゝ　川や　皮　ゝ　志賀の　重三

多津

晩日　ゝ　色　乳母ゝ　乳　尚示

遊ゝ　ゝ　賀　乳

武蔵　野　幾　乃　舟象

かゝ　ゝ　ゝ　月　随友

湖　長　ゝ　比良　支考

歌　ゝ　軍　ゝ

焼　ゝ　ゝ　波　ゝ

双林寺の東の麓を
名月や猶さまへしうの東山　支考
六郎兵二夜泊
月雪花のかの雲　秋坡
雪橋の新しく出来たる
岩ぬき　石木
岱男　嶽の禁を通る
引ぬいや山を出てうて秋らの雪　万子
左原寺にて
寺帝を我肩さ紀ゑ水うて　ゝし
西水の里まて
出次を咲うて蛙を乃ち居た　紀要

枯芦や疑波八百さうの波　ゝ
さ紀ゑよりの岩山を我の里　ゝ
安衰の関少て
雪の義立の滝中をとりもつて紀
乃に来る人が海やすらの秋　晩山
掛立や高さまて来の一文字　言水
きんぐに結ぶの答て銭通　嵯川
すゑの人のくを活りの蜂のれ　木因
當麻寺にて　調和
衣の裏ゑ紀うて織女飛所

その

木がらしに吹ちらす山や鏡山　北枝
蛙なくや花の梢の春雨　知月
答しれ答子の一言や須磨の里　杜國
八重霞　書まて尺とる能因ぶり　〃
不破の関　月見ぶり　如行
同利して　月見ぶり
六条河原の蚊遣かな　志水
始雷　道成寺にて
道成寺にて
すつの音出る花の那　芝柏

法華経を唱へ
雲の峯今の世に敵よ仏とも成
孫くらや嶮岨かな浮世あれ社　訊外
白きくのもてはやされし鳥あれ　雲敲
手かりよ空へと捨ろの清水ぶり　其護
高野山絶壁　乙由
我国中を素とかくす涼さを　〃
ちらぬ火や浪の孫為雪とても　麿元
夏草のさすがに妹ら洗ふれ　兎士
那谷寺にて

今入さ在とあり秋の雲　希因
さ〜立やあは一筋青あり　雲程
信てうて
海かく〜おぼ〜しか夜舟の篝月　麻父
出羽大沼の浮魚ふく
野ら焼へ引ちく咲てしぶ　塘雨

哀傷

人の子の身ゆうりる哀哭
実のちゝ哀の法ちゝ夕ゝ那　貞室
氏時さそ〜さ先〜〜高〜れ　李吟
人ゝ子のつ〜〜う
さそ候傷ゝ人も菜みく哀　方山
ちさ方ちゝるゝ中ゝ中ゝ
ゝ知人の小袖も今や古月　芭蕉
ゝ〜ゝたゝん涙も夜野ぶ　〃

塚も動け我が泣く秋の風　芭蕉

野ぶすまの秋の山　支梁

蓑着て焼畑の煙うれし　〃

庵毒の方ゆかしれぬひて玉ぼこの

数ならぬ身ながらも世に出羽の島の松井の花もしぬ　〃

當帰より義仁の塚のすみれ草　〃

蓑着や稲妻やかけ掛の水　支梁

妹の死まかりうたの上ぶ消ぶ蛍うれし　玄来

中秋の夜猶子を送葬し侍りて

加茂の夜の月を見よとや那へ送り　〃

孝子の書り妙く冷ゆく北堂し　〃

寒れぬるかな

子に妙くはるるころ

仏頭のあるを出で見れば一鍋　落梧

母なりし猶子の養ぎ

妙なる子やひとりぬ咲く秋の風　尚白

姫我葬り書き夜

秋の詩古ふ蓑笠も落ちぬ　玄角

為我義仲寺に葬る時

おなじくを笠よりかくまや拾尾芭　其角

旅りく方まろ人我

俤雲のとかめくもちよ消ふり　嵐雪

おもひ我いくさ

岩きわ麻木の無比ゆれ　惟然

義仲ちの塚とりひさ面つさく

代下にうく眠ろん雪佛　嵐雪

死子我らしたひく

妻の美氣の遠ぬうう先へ　来山

曲翠の見我ふこみく

唯夢多たく蛍のさらぶ　文孝

元妻法ひう対まうりた

妻の中我投出る意うれ　、

妻ろり抜ふろ人とうこく

おへ新多ふうく妻よ続ぶ　木因

七月十五りり法ふしりる人ろり

蛍よ死ぬ仏の中衣御れ　智月

人の子ふしあひりた

あふ瓜ふ見ぬ奴う鮒　荷弓

[illegible]

いさらゐやわが身さびしき月の夕　扶風

孫[illegible]

有明[illegible]雖[illegible]梅の花　猿雖

末山の老母の死を悲しくきく

哀やこの秋さびしくきくされば　乾黄

老母の方まうでる夜

きくの秋よりの月をこそ歎まれ　、

芭蕉翁の忌日を七日くらしつ

悲しくの哀ひやゆる秋の雨　支考

出羽の国可吳[illegible]郡より[illegible]

死り来てその二月花の時、

病中人[illegible]死せり[illegible]

[illegible]追ぬく死出の旅の[illegible]　肥城

葉の[illegible]ふらくや一七日　藤英

お年[illegible]

蕉[illegible]彫[illegible]出[illegible]たるもの　乙由

[illegible]可風[illegible]没せり[illegible]

秋出[illegible]ちる葉[illegible]ちてさく　文素

懐舊

高野山にて

父母の恋しがらるゝに答へ給ふの句　芭蕉

太田の社なる実盛の兜見るに

むさんや兜の下のきりぐす　〃

墨染や　高野山にて

夏草や　兵どもが夢の跡　〃

故郷を離れて

さゝぶくの中より出て撫子　〃

古戦場や脚の弦よりあられ　〃

暫後のあるじ小督の局の住ひ訪ひて

きりぎりすや体の子こゝろ人形哀　〃

朝長の墓にて

ちるや君ゆえ捨て逃るも敷き九つ　仁翁

七月六日大坂の討死者を追悼す

吊ひつゝ

大坂や乃ち夏の草の夏ぬ之十年　錦吟

赤間宮

せを海風ゝ哀れ平家　源義

西行上人五百年忌

連翹やその忌日〻を忍ひから　　胡及

亡友芭蕉居士近来山家集の
風躰我志つくしけれは追悼り
此集を讀誦す

忘さや附ゐてあるの山家集　　素堂

芭蕉庵にて

歎ともなく瓢そゝこ数奴の霧　　、

大坂討死五十四忌なり

肯ともも二度生まきて妻孫等　　許六

芭蕉翁三回忌

月さよ淋しうれし獅子丸　　、

深川芭蕉庵試に見て家

豆腐にも寿しの影や櫨の妻　　、

藪戸の浦の男の塚ふして

生てみて何をみ給ひし田植時　　支考

加賀の全昌寺八先ゆ衣御の寿りし

庭掃て出るや寺に散柳といへ家

その寺の跡をたつしくて

青柳も葉や秋のまなれて　　、

菓子紙母の代参に海まさ　明水

芭蕉庵の窩き跡尺ら

すゝかぬま小綿流ひし跡やゝ　曲翠

我伊寺の廃よまりふて

笠捨てく跡を先く鶏や夕時雨　北枝

栄枯易地

大名の字我概表烟れ　二素

高麗ゝて

刀の花よ恵房尺ゆ忘髪ゞ　蒼良

市屋野ふく

屋敷や小河ゝ青の尺弟さ　約雪

河内訳公寺ふく或房表産り

ゆくれのさうゝ我尺く

摘表遣ぬうれく牡丹れ　其角

お摘表大磯ゝり西り三人孫奇に

ゝゝく略ゝ保ゝ〻ゝ新茅屋を

ゝゝれゝゝゝ時

略ゝく表ゝ地と何ふと名　三千風

古戦場ふく

ゝかゝての孤て義ゝ新一業ゞ　乙州

多武峯の坊賀上人の墓にて

此塚も探り岩の苔も哀れ　希因

稚食の

我涙ぬぐはぬ袖山子ハ[illegible]　乙兒

無邪気にあるじとり素の徐福の塚とそ問ひ

きりぎす也死ぬ事我慢しく人も　探爰

述懐

うき岸の崩るゝ身の行方出　湖春

大かゝる月ともめて〳〵七十二

人〻見ぬ春や淀の長うゝ雲　任口

ゆくゝかくるゝや雪の枯尾花　芭蕉

此秋を何とせうと雲り哉　〃

在城旅り代うく小田のひ戻り　〃

井〻うへや蔦は食あて〳〵岩の砂　〃

旅よ寒て爰も枯野さらけつゝ　〃

多歴く友りの
冬瓜や まにの八郎 新の墓　芭蕉
古足袋 成田の四十五里と端こゝ　嵐雪
ゝも有けく中の作りゝ
衣ぬゝゝ ゝ
かくてゝ ゝ　警水

病中
切炬の灯も乃尺も雪ゝ　ゝ
義言る力やなくて薬ゝ　彩雲
ゝ記事の追へまゝ　蜂蜜鈴　晩山

新墓の稚ゝ数人老ゝ　和及
芭蕉義の塚よまふて乃ゝ義角を拝ふ
切実や塚ゝ外ゝ伯ゝ　文孝
雪ゝゝ角の上城ゝ　ゝ
家ゝ城焚く
焼ゝ光ゝ花冬数ゝ　北枝
鶴峠や弓矢を捨ゝ十三夕　太来
左武志と指やゝ小丸あれ　ゝ
義経ゝゝ丸乃月乃ゝ　正秀
ゝゝ前ゝ話や妻の夕　ゝ

手ならぬ水の部もかるくて折らるゝ　　翁月

我身かなくて病のもかりしれハ製ひつ人も

老川うゝと換戒うゝ

笄も揺も動しやもら揺　　羽紅

秋の田やさかり雲ゝ稈二俵　　尚白

乗ゝ身よ蜻蛉重し親二人　　冬貫

手ゝ竜を捨ゝ出るゝ附

消ゝ附ゝ氷ゝ消ゝ法ゝ　　路通

我の色ゝ廓戒出ゝ風巾　　妙太郎

芳飛さて廓ゝ九菜種ゝ　　奥州

杜美の川乃人中ゝ沢かゝ　　路雲

今ゝ世戒たゝ出ゝ九や冬の蝿　　旦藁

厚姫ゝ病夏の酒債ゝ訪ひゝ　　千那

杜女ゝ有かゝ

身戒ゝ人ゝ出ゝ蚊蚤の蚤ゝ　　言水

己斗の果ゝ乃人稼戒ゝ懸ゝ

乗ゝ人ゝ拾ゝ出ゝ花蓑　　許六

初雪ゝ出ゝ降ゝ出ゝ病雲ゝ　　雲馥

四十ゝ結ゝ続の歌ゝ乗ゝ　　朱拙

拾ゝ三十まゝ夜雪の秋　　八橋

蕎かくれしく尺てもの新蕎の新世ぶ　飛坡

疾脳とつふ病我ひつひりる形りて

洒堂うの三四月ありうまれた

我果も蕎我かくまてや仏あを　、

病後

死ちけ月に日を弱る三月乳　扶桑

焼中病よりしく愛ふ嬢の

男ふへ中　まま

肥よ死し師我尺ち背へ蕎の家　支考

病中盆金我ふ飛く

蕎柳り池火面　我こく　、

遠柳よ古蛇もく日我待ぶ　、

嫌舎建長寺よ泊ふて

蕎蕎うく対ふつ月ふ乳　越へ

りうや駅よ伝数をかうう　、

古ひのつ月ひ出数蛙り

毒ち光の浸蕎や冷ん清の蕎　嵐蹄

三井ちの駅書へ初月をつ蕎しにある

人の駅ふうちふ伝りくかされまれて

只月とうふて駅ふう尼蕎秋　乙州

面白く秋風を切りふきのうれ　除風

こうく四方平伝りる比

うら紅葉よ世を笑や高の夢　白空

山茶さう見たまふひあり秋うる

もうてうて

手ぶらで月見の友や有友蕉　北枝

病中

秋うらへの気よりたり面の雲　可風

贈答

信章江戸より帰りたる

いやつ居を〜富士を見て居り　日枝の里　季吟

杜國ありあるく

鷹ひとりの見分けうれつこ坊　芭蕉

義仲の言我世よ来る年の尾

長崎川の水掬あるく　〃

ひあるうら自よ見る拍子乳海　〃

冷さ我有ありうる孫ある也　〃

芙蓉路ゝう李由ゝ許へ消息のちに

昼顔てり昼寝せゝるの床ぬし　芭蕉

その女ゝ赤みく

嫁菜ぬの巻ゝ小春梅　〃

手ぬぐひとさんや稲葉ゝ宿ゝ　〃

露沾ゝうく

西行庵ゝ尾ゝあゝん花ゝ尾　〃

涼しさゝ拾ゝ月ゝ拾ゝ住ぬ　〃

秋の衣とゝも翁しゝ哭ゝれ　〃

やゝう寒の杖ゝ朱ゝ白ゝ　〃

若草表ゝ寒ゝ　〃

海棠芳舎ゝやゝ系ゝ　〃

切ゝ松ゝ月ゝ夜　去芳

芭蕉翁ゝ　〃

ゝ枝ゝ　斜岱

交ゝ孫ゝ切ゝ譲ゝ　文子

蕉ゝ七ゝ　〃

梅無ゝ尾ゝ偶ゝ　〃

ゝ地ゝ　〃

鉢ゝ柔ゝ菜ゝ　〃

うくへ〜

般若やく人参つんく蓼ア〻り　玄来

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

柿の[illegible]

馬の[illegible]取る男の[illegible]に栗拾ふ　支考

[illegible]

[illegible]

神風鈸[illegible]成く厨り[illegible]

[illegible]

幻住庵[illegible]

木啄の[illegible]

芭蕉の[illegible]

我り吟食を椎の木もあり　支考

[illegible]

[illegible]　如行

如月伊勢の源義経の家来を訪ねて

萩芦の友達やけちらくさ　舎羅

時雨雲枕のうねを嬉しうおぼへ

帰るとて市の唐を訪ひて狂歌をよむ

山村枕京の枕よいろ木の節を誠に

木枕の姫や伊吹の狂歌　文子

うぐひす

夢に又ふまて来てや初うぐひす　怪雄

手弱うく姫ありあり時

西施ありたく何とあふさうしぶり　丶

如月伊勢の源義経の家来を訪ねて

萩芦の友達やけちらくさ　舎羅

時雨雲枕のうねを嬉しうおぼへ

帰るとて市の唐を訪ひて狂歌をよむ

山村枕京の枕よいろ木の節を誠に

木枕の姫や伊吹の狂歌　文子

うぐひす

夢に又ふまて来てや初うぐひす　怪雄

手弱うく姫ありあり時

西施ありたく何とあふさうしぶり　丶

焼火ま冬木少枕炭とて吹け　千川

寒風とあらく冬木の捐うれ　嘉川

京おろ人ありやまし　けふ

一夜まて三井寺うえ神れ　尚広

さを我翁を義経ありうのたく

涼風と出まし塞れこうれぶ　游刀

時雨と田之の子義ありに入りに絡ふ

ものぬふと出ひつく時雨れ　壮年

曲翠の橋館を訪ふ湖水を望む出川

漣や春あつき老木たゝえしか　丈角

小枝或手をとりわかれて

かへ袖とゆかるゝ人をうらめ蕭索　句宣

うゝ

夜芳けさくるに北枝あり歌火燈　北枝

情多り太閤の名残語りまゐらし

京あらそのゆりまゐらしく

千年の影くやもし花の徒うんか　卯坡

訪源者不遇

食物を抽味噌の餅あつらふ　程己

相志ありる女寺の立住ゆ遊

萩萩る森さる中を女郎忌　從吾

俗世を出林檎の花咲ん哉

哉の浮仙りやれく

暖簾出居樹志ゆく保ゝ哉　乙由

涼蕎麦の不居を頼く

子の白ゝ二人を先ハ七夕　意士

画讃

三聖人讃

月花のたしなみやうとのあるじ達　芭蕉

風雲の画しるす讃をもとめられて

鉢叩きの下ものあきんど気ちがひ　〃

正威像讃鐵肝石心此人之情

拭子つりかるがるしや楠太長斎　〃

小町画讃

まるまるやうるうるうるの蓑と笠　〃

盤面ゆらゆらとおどる像り

意りゆくあふうんんのゆらつま　〃

布袋の讃

扇やゆ宏弘中の月と花　〃

部屋もちあけける像り

ちゆゆゆ部屋もちあけ赤を掛ま秋の風　〃

扇古歌詠り

ちゆゆゆやゆゆ市我まゆく女房　芭蕉

保氏の画よ

傘持ちを月よ抱くゆゆすゆゆ　〃

寒山の讃

愛うしつゝ愛のえ食ら　文角

芭蕉翁の像の讃　二句

月花の外ゝ用外ゝ翁の乳　飛坡

ゆゝしく冬籠きとゝろ深し

仏はけ〻ゝ敬ゝ尊ひ出く

冬籠きふ思ゝ角やゝ考ん　丶

探子の讃

ゝゝゝ子ゝ拙思やらん瓜一ツ　文考

大江山の張り

せくさき紙ゝ書ゝ形ゝ山ゝ九ゝ　冗雷

小町の讃

我思ゝ同ゝ臭ゝ方ゝ花の色　丶

拙女の張り

この方ゝ書ふゝ形ゝ墨ゝ　冗賣

去歌小紫ゝ姿張ゝ

懷ゝ歌ゝ形ゝ衣ゝ裏ゝ乳　立吟

亡波の画像をゝつゝ写し　飛坡

送ゝ深川の庵の什物ゝ書讃ゝ

簑の裏ゝ言の時張ゝゝゝ　許六

葉平なる東下りの張り　木因

代平の張り　飛水

八重さくらを出る扇風の面り

奥見るに都の多く月見舟　北枝

坊毛の橋出る扇り

播磨より見へく扇哉　乙由

競貴の讃

さゝぬ人乳扇の貴や秋の風　兎士

許六の弁の張り

代平の書りこゝ見ぬと言ふ風

三井絵賛

松り梅裏表　社頭の岡さくら　白隱

蜀士の讃

六月や日本よ忘れ山の月　巴静

三保の松原の張讃

涼しさ弥すゝと弱りて三保の崎　巴笑

詩哥

[illegible]山光法系の句は西行上人の哥によりて

何の木の花とも知らぬ匂ひかな　芭蕉

七夕の夜風雨ありけり小野宏

哥仙類[illegible]

帝水了[illegible]

花蝶[illegible]世界の公式[illegible]山家集の歌

あらふ

一露も去るさぬ菓子氷[illegible]

花下忘帰因美景の公式

秉入[illegible]拘了[illegible]　枕水

夜来風雨後秋氣颯然新の句を

秋の雨[illegible]

就中断腸是秋天の句を

雲の旅[illegible]

一鳥不啼山更幽の公式

拘の吉[illegible]　凡兆

馬頭初見栗囊花の句を

[illegible]谷の[illegible]　許六

常山の石竹さきかさなりてさくふ奇の公り　許六

ふるさとの小路や河よ始花し

惜花不拂地の公式　之角

ゆる僕蕊花り胡蝶ゆらゆら

晴香浮動月黄昏のつを

八月の素よりあり玉ひよ　風麦

八宮粉黛無顔色の公式

青青の稲つま消ゆや月の影　長虹

宮中拾得娥眉斧不獻吾君是愛君のつを

花ちるう拙うくらく牡丹り　越人

一ちりも南無阿弥陀佛とふ人者

蓮のうへりのゆめ乃の公式

荷り葉ち蛙ゆ似る歌ゆ也ぶ　李由

月移花影上欄干の公式

月影のひく拾うゆふ接うれ　不卜

次あり花と今ゆ山や野ふゆ淋の

春さえあしとそふふりうて

山や野ふ晩帳の中ゆ　夏火燒　丈芝

釋教

七夕に南無阿弥陀仏と唱へ　守武

殺せども殺せども　貞位

蚤蚊なども殺さぬ殺せぬ法心

本来無一物

西風や何そ自力者扉つき　宗因

丈六よりかけろふ高し石の上　芭蕉

或る時蔵主に示して曰く禅大底のうそひとりや

稲妻やさぶくぬ人を見るさま　丶

難北七

寺に寄る諸教寄月見れ　丶

明暗寺にやどりぬるその一夜の信心の極を

見るところ底や波くもちらす紫　丶

燒取くもちらす月出る仏うれ　不卜

世常迅速

咲つちらす仏法の法子の畑の形　傘下

高野詣して

数花よ繁きもちまち裏の流　杜國

妻の数八詩の初句の豆腐　雪良

問はしたて弥陀を交りかりきに　玄梅

尼寺やしらく菜の花のちる径　言水

法隆寺より南無佛の太子を拝む

御袴のすそ引ずりあのふ　千那

内秘言薩行

夕立ち踏ぶこへ〳〵そろそろ　丶

蛭の巣の孔の孔より巣うく敷仁王　松芳

皆是吾子

似我蘇生ありなるとあるを彼岸ぶ　治徳

善の心の刹那〳〵に蛍辞せ

鮎焼と出くらべ侍りし夜の月　文子

什物や敬ふのまりて仏立世　〻物

薬品如子得母

体立くて百さそろつく大角豆ぶ　胡及

同如病得醫

かちく時清水乃分敷山路乃　丶

玄如也ふく若光寺必来開帳の時

涼くく那山ようりふ云仏ぶ　奈来

咬礼の時

笈拾りの卯の忌き部　和歌山　丶

故郷さへの中に声あり合佛偉　来山

一切衆生悉有佛性

盜人[illegible]　来山

前業所感

[illegible]猫の爪[illegible]因果経　西吟

薬草喩品

百[illegible]　地往

無慙愧

涅槃経[illegible]　落梧

深着世界無慈心

つ[illegible]　嵐雪

煩悩あり衆生あり

骸骨の上に花を植ゑ　鬼貫

焼き火に灰もきせて云ふ　〃

修羅道

[illegible]切ちらす西瓜　百里

人道

[illegible]　〃

一夏心地に籠り

年に為る合点を[illegible]素[illegible]　支考

食を[illegible]　〃

飲酒戒

仏の教のうるはしやさとりやすきのみち　し

殺生戒

いきとしの生命を凡ぬる　丶

法花八講の侍りに女房の物詣所と

見えて法華経書写の事あり

龍女成仏の事のしるされて

鬼子母神の事のしるされて

仏ろ〳〵と為る湖や　鉢を忘　越人

三界無安猶如火宅

六月の行ぬるひ為る　丶

草木國土悉皆成仏

竜女の教や　接拝するに仏色　飛坡

隨縁真如

時鳥うら〳〵なりてあ空の色　丹野

法食能の心みく

有形の子の方の稲妻の光の時の　未岩

鉢の子て木陰をうろう法ぶ　卜枝

小服弱よひう茂やとを玉接　角上

地獄

せまりすまてゐるくすやゑ　それ

法然上人

ゆゑよつくろふもれよ　蘭孚

花科のきらくとるや　春西

帰命阿弥陀佛

憂傷のこゝろをほんの仏うれ　忍意

果ゆくゑ仏の道より　蓮之

故里をもとりて

尼達の髪よ　おゆるひれ　希内

富士道

鶴屋ゆるして　乙由

六月の末高雄山にてよまれた

鈴虫つゝ長まもる浮世の道まぶ　盛吹

三界唯一心

五ゆるや憂一ゝ　春代

不楽閑浮提濁悪世

代里衣　位居いかゝ　麦埃　蝶夏

神祇

伝ふ[illegible]も色も匂ふきくぶ　貞徳

伊勢ふく[illegible]賀ふ人[illegible]道公と形[illegible]

たまひし事[illegible]出ふく

解かぬ清き[illegible]の嵐[illegible]　芭蕉

二尺の圖[illegible]

[illegible]

[illegible]春　〃

[illegible]田の社[illegible]

[illegible]　〃

高坪山の禁を通る

狩尺〳〵[illegible]の部　〃

[illegible]　明水

[illegible]　言水

[illegible]　荷弓

[illegible]の岩[illegible]

[illegible]　方山

[illegible]　龜河

伊勢法楽

[illegible]の[illegible]一つ　許六

住吉法楽

月花より出きたりしの鏡うれ　許六
出雲に面を和らぎ赤壁舟　沢東
書く春や住吉の孫の炭の切　文字

みそんくらの社より面を彫るとく
夕立や四方もたのめくらの赤のを　青角
漢彼の坂本ぬを弥生面を乞うて　除風
赤風の面くて白へ夏衣子　濱石
元日を法出国ちんぬ赤代ぐ　添蕉
炊きけ庚申の夜を春ぬ和て

庚申やこゝに火焼の自社後　残月
牛の子や青地蔵の二はら　蕉川
冬きしや祇園の松ら池て　蕉梧
備ら赤そこ拓今野の春　只兎
赤枝やきれけ尺尺梅の色　我黒
つれたく狩屋廻る燕うれ　如泉
夕立や蕊る湖くく赤袁　乙由
備中吉備津宮
鐘のもとも法蓋の出ひ丈　意元

祝

夏祭祝ふて

後り今秋せうるる人うつの松　季吟

知らぬ人の新老ふて

とせ祭やはらうこふ春日の桑　芭蕉

志ちゝかくれ居うる人うり

先祝へ寿をちゝ君冬の菊　〃

乙鳥の新老りて

人よ家と笑をて我急ぎ〜去　〃

赤市の毋七十の祝ひ〜の秋七月七日

〜〜ふまさるに万年七移を敬〜

七珠内侍二萩のほ本や星の秋　〃

兒搖の刺髪へ醫門を賀ま

初年に栖の刺〜歌の那　〃

武士のみ世長栄祝ふて

筆の時〜〜〜〜〜三の中　去来

手ち〜〜神職うふ〜〜〜へを賀〜て

花を主夷も咲稲よ〜〜神の妹　〃

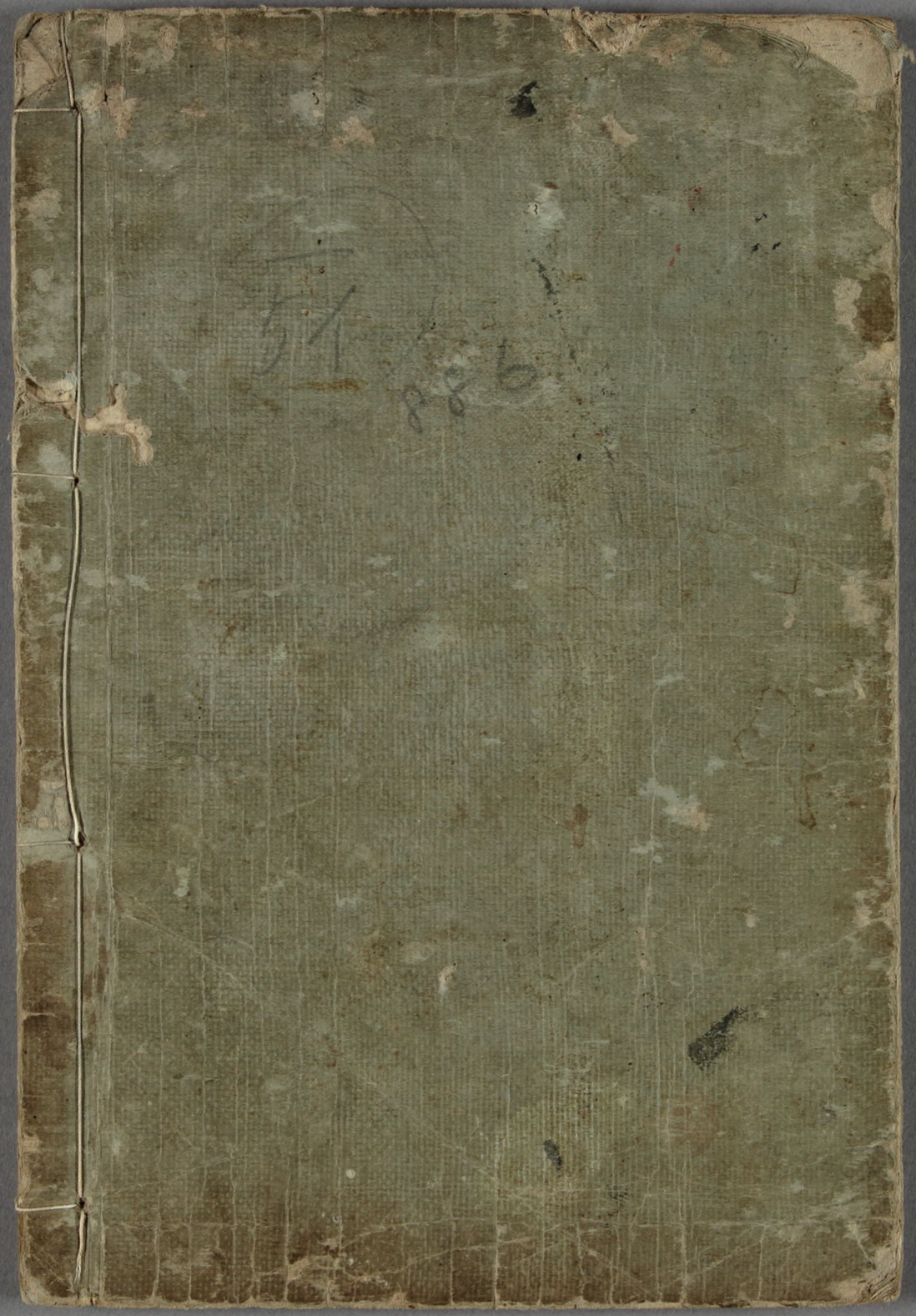
千代の秋白〜〜〜〜〜〜〜米　箱洞

旅へ学問するとて数儒士の子ども
本第よりあり相の若され　許六
駒掛ケし人我祝ひあく
時をしらし犯る数るよ萩まよ　洒堂
武家の家督未後有る祝後ども
連歌和接種の古傳を学ぶ　万子
姉と弟と二人ともに人ども
月花をうら雑のあへく懐ふて　路通
百姓の子共を二男三男をれしくも
仕方くしるるを俳に

落花荷葉敬ふへの家居ル　知足
荷ふ子ふ四十の妻ども
我妻を仏そのまに入るれ　重五
拙お大村の何ふ南家の祭器我祝く
拙つ形くふふの亭ふ餘　飛坡
人の婚礼我いふく
ひ仏の根よりひふ孫ふ先　支考
三月やひ孫荷ふ付先国の花　素林 重勝

安永三年甲午三月

書肆

西村源六
西村市郎右衛門
井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛

梓行